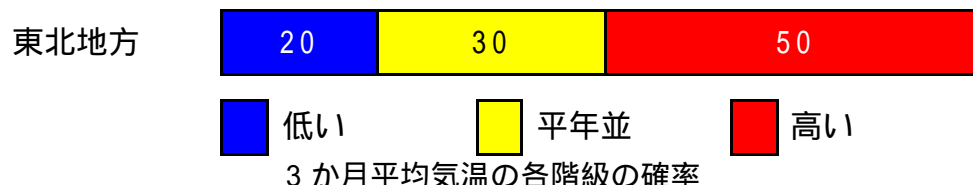


# 東北地方 3 か月予報 ( 7 ~ 9 月 ) の解説

平成 13 年 6 月 20 日 仙台管区気象台

## 1. 予想される天候

( 1 ) 3 か月平均気温の予想される各階級の確率 ( % )



[ 概要 ]

7 ~ 9 月の 3 か月平均気温は「高い」の可能性が最も大きく、その確率は 50% です。「平年並」の可能性が次に大きく、その確率は 30% です。「低い」の可能性は小さく、その確率は 20% です。

( 2 ) 可能性の大きな天候の特徴

7 月：天気は概ね周期的に変化しますが、梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響で平年と同様に曇りや雨の日が多く、一時気温が低くなることのあるでしょう。梅雨明け後は、太平洋高気圧に覆われて気温の高い日がある見込みです。

気温、降水量共に平年並でしょう。

8 月：太平洋高気圧に覆われ平年と同様に晴れの日が多いでしょう。寒気や前線の影響で、曇りや雷雨となる時期もある見込みです。

気温、降水量共に平年並でしょう。

9 月：太平洋高気圧に覆われ残暑が厳しい日もありますが、天気は概ね周期的に変化するでしょう。また、秋雨前線の影響で天気のぐずつく時期がある見込みです。

気温は高く、降水量は平年並でしょう。

なお、7 ~ 9 月の 3 か月間の降水量は平年並でしょう。

## 2. 前回 ( 5 月 21 日 ) 発表の 3 か月予報からの変更点

なし

< 参考資料 >

平年のおおよその天気出現日数 ( 日 )

	7 月		8 月		9 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	15	13	18	16	14	13
雨の日	11	11	10	10	13	12

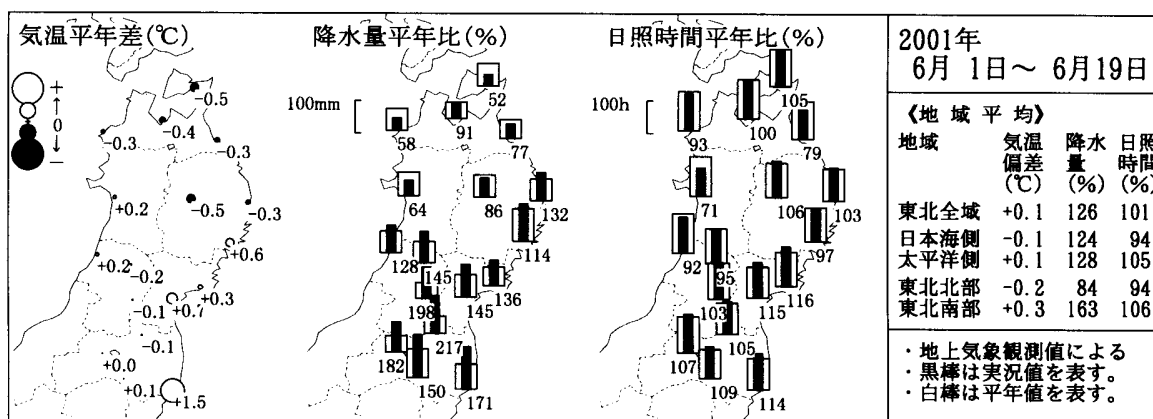
注：季節予報では、「日照率 40% 以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は 1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

東北地方の平年の梅雨入り・明けの時期

地域名	梅雨入り		梅雨明け	
	平年値	平年並の範囲	平年値	平年並の範囲
東北北部	6 月 12 日頃	6 月 10 日頃から 6 月 13 日頃	7 月 27 日頃	7 月 23 日頃から 7 月 30 日頃
東北南部	6 月 10 日頃	6 月 8 日頃から 6 月 11 日頃	7 月 23 日頃	7 月 21 日頃から 7 月 26 日頃

### 3. 最近の天候経過と循環場の特徴

#### (1) 最近の天候経過



東北地方における6月(1～19日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

6月(19日まで): この期間の平均気温平年差は、東北北部で-0.2 と平年を下回ったが、東北南部で+0.3 と平年を上回った。降水量平年比は、東北北部で84%と平年を下回ったが、東北南部で163%と平年を上回った。日照時間平年比は、東北北部で94%と平年を下回ったが、東北南部で106%と平年を上回った。

上旬は、前半高気圧に覆われ概ね晴れたが、はじめ東北北部は気圧の谷の影響で一時雨や雷雨となる日もあった。後半は、梅雨前線や低気圧の影響を受け易く、曇りや雨の日が多かったが、東北日本海側はオホーツク海高気圧が張り出して晴れる日もあった。東北太平洋側の北部では7～10日にかけて冷たい東よりの風の影響で気温が上がらず、青森県の下北や三八上北、岩手県の沿岸北部には低温注意報が発表された。

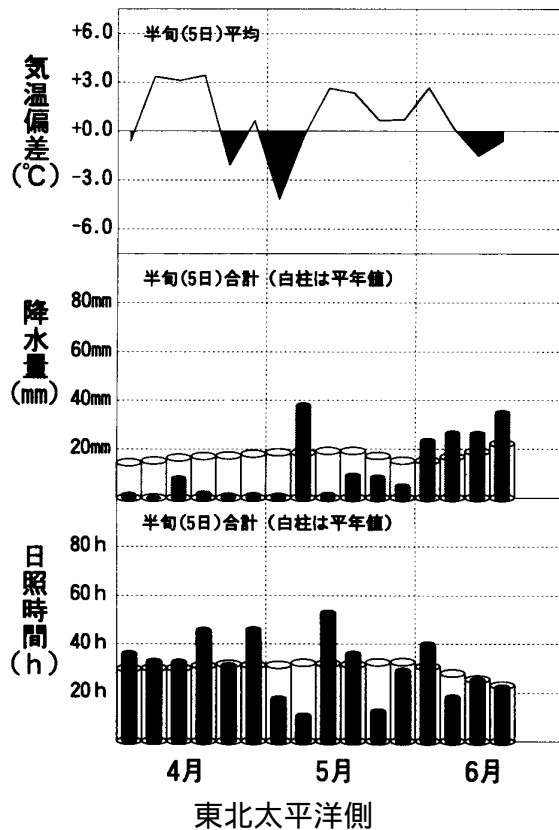
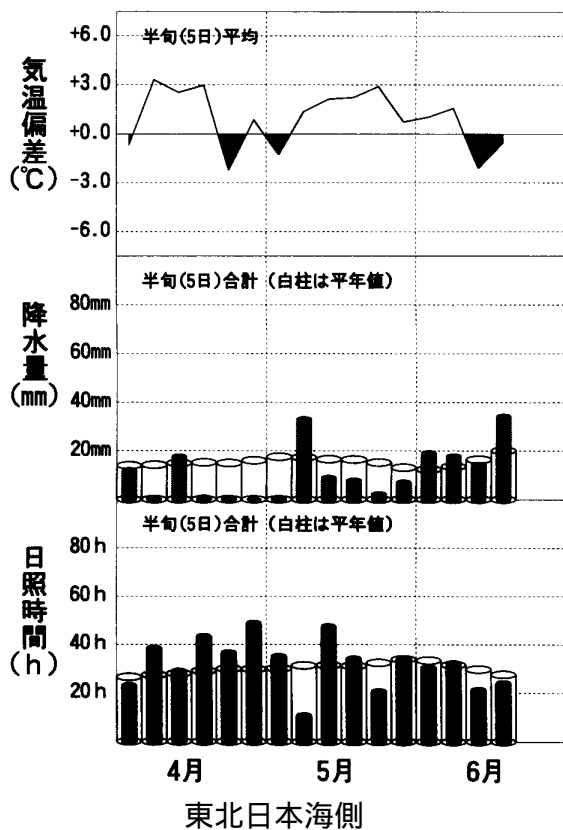
なお、東北南部は6月6日頃梅雨入りしたと見られる。(ただし、この梅雨入りの時期は暫定値であり、後日検証により確定したものが発表されます。)

上旬の平均気温平年差は、東北地方で+1.1 と高かった。降水量平年比は、東北地方で103%と平年並だった。日照時間平年比は、東北北部で94%と平年並、東北南部で111%と多かった。

中旬(19日まで)は、はじめ移動性高気圧に覆われ概ね晴れたが、上空に強い寒気が入ったため一時雨の降る所もあった。その後は、梅雨前線が一旦南下し移動性高気圧に覆われて晴れる日もあったが、低気圧や梅雨前線の影響を受け易く、東北南部を中心に曇りや雨の日が多かった。上空の強い寒気や冷たい東よりの風の影響で気温が上がらず、青森県では11～16日、岩手県の沿岸北部では13～16日にかけて低温注意報が発表された。

なお、東北北部は6月14日頃梅雨入りしたと見られる。(ただし、この梅雨入りの時期は暫定値であり、後日検証により確定したものが発表されます。)

中旬(19日まで)の平均気温平年差は、東北地方で-1.2 と平年を下回った。降水量平年比は、東北北部で72%と平年を下回ったが、東北南部で207%と平年を大きく上回った。日照時間平年比は、東北地方で99%だった。

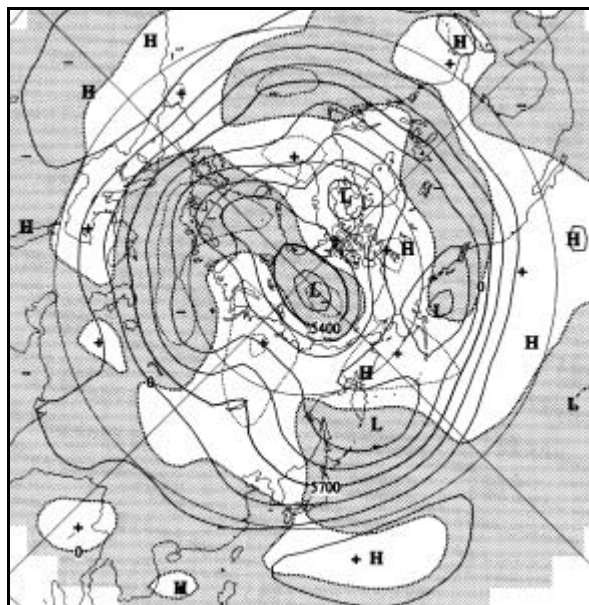


半旬経過図

## (2) 中・高緯度の循環

6月(19日まで): 500hPa 高度場では、極渦は極付近でまとまるが、バイカル湖の北とベーリング海で気圧の尾根が顕著となり、正偏差が広がっている。一方、日本付近はカムチャッカ半島の南の寒冷低気圧に伴う広い負偏差域に覆われる。また、日本の南海上の太平洋高気圧の勢力はほぼ平年並となっている。

上旬は、低気圧が北海道付近を通過することが多く、南からの暖気の流入や高気圧に覆われ晴れたため高温となったが、中旬は一転して上空の寒冷低気圧の通過やオホーツク海高気圧からの冷たい東よりの風の影響で低温となり、寒暖の変動が大きかった。



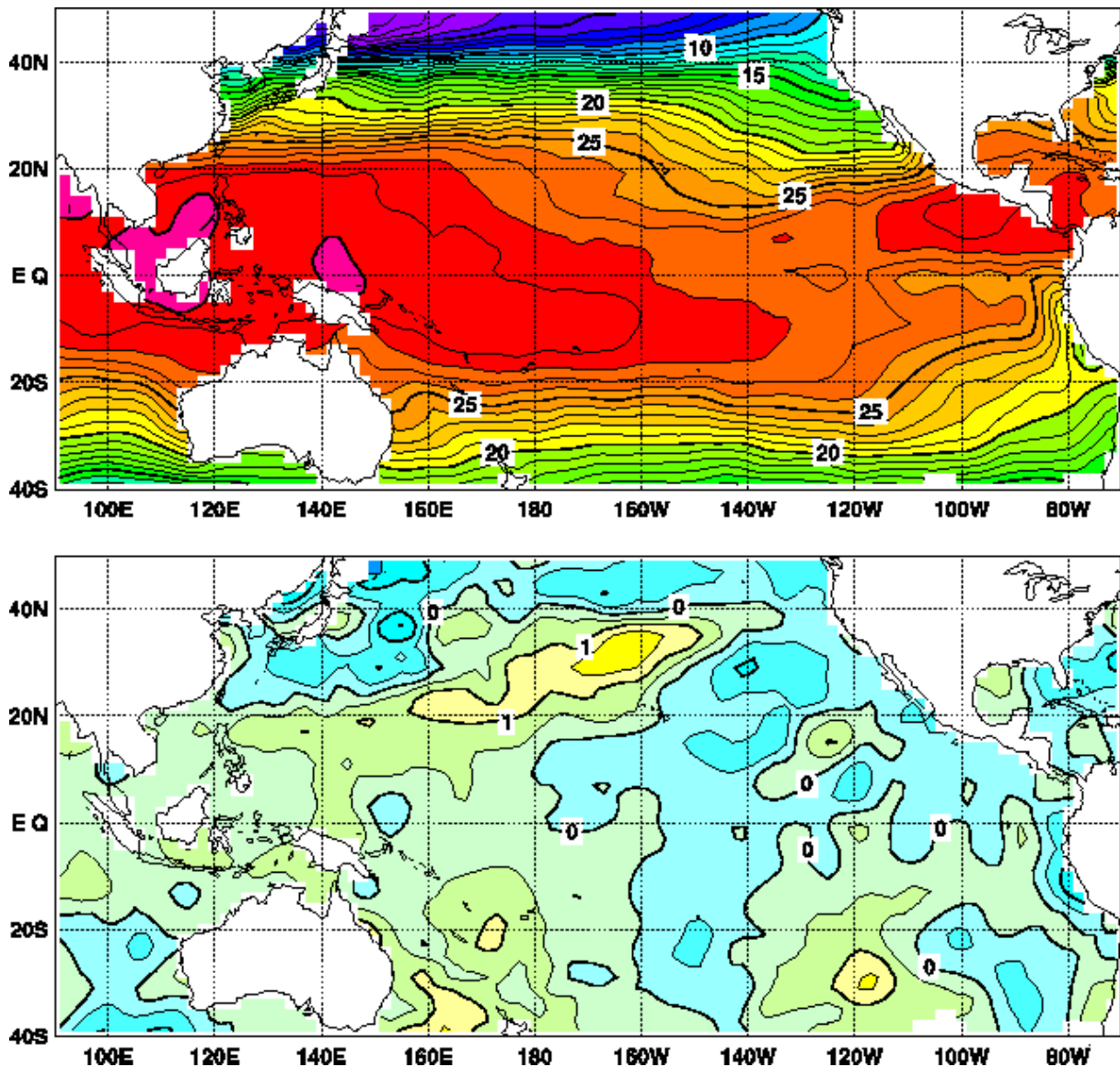
6月1～19日平均 500hPa 天気図  
等高度線間隔 60m  
陰影部は平年より高度が低い領域

### (3) 熱帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の5月の海面水温の基準値（1961～1990年の30年平均値）との差は+0.2 であった。

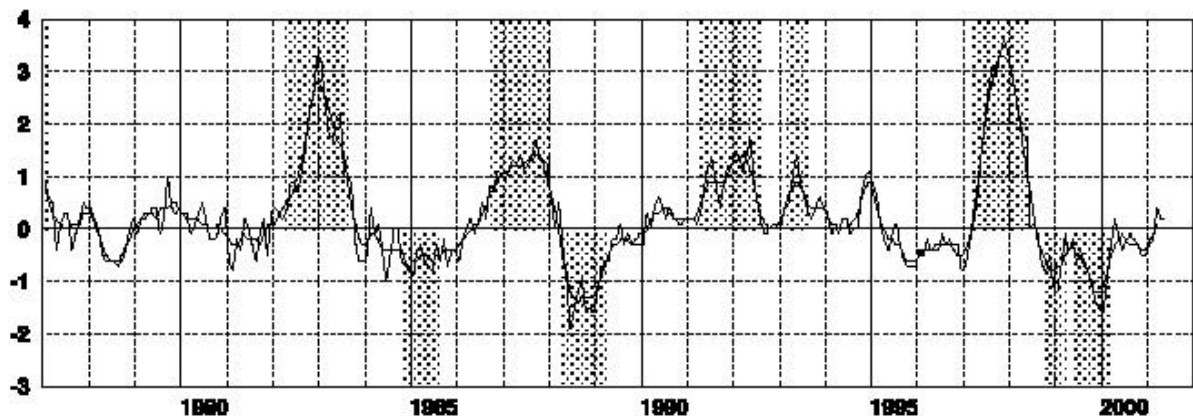
5月の太平洋赤道域の海面水温は、東経140度から東経150度にかけて+0.5 以上の正偏差、西経85度以東で-0.5 以下の負偏差であったほかは、ほぼ全域で年間偏差が $\pm 0.5$  以内であった（下図）。

5月の南方振動指数は-0.8と、昨年7月以来で初めて負になった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）



2001 年 5 月の海面水温図（上）及び年間偏差図（下）

海面水温図の太線は5 毎、細線は1 毎の、年間偏差図の太線は1 毎、細線は0.5 毎の等値線を示す。海面水温図の陰影部は28 以上の領域を、偏差図の濃い（淡い）陰影部は+1（-1）以上の正偏差域（0 以下の負偏差域）を示す（年間値は1971～2000年の30年平均値）。



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差（ ）の推移  
(1977年1月～2001年5月)

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は基準値より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は上側に、ラニーニャ現象の発生期間は下側に、それぞれ陰影を施してある（基準値は1961～90年の30年平均値）。

#### (4) エルニーニョ現象等の今後の見通し（2001年6月～2001年12月）

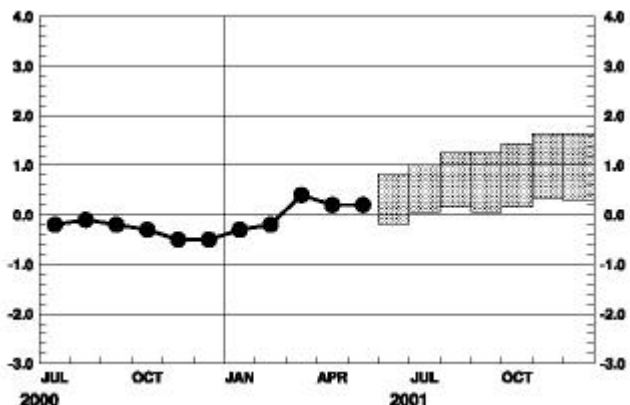
エルニーニョ監視海域の海面水温は、5月のような基準値（1961～1990年の30年平均値）に近い状態から徐々にやや高い状態へ推移するものと予測される。

#### 【解説】

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は4月と同じ+0.2であった。太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差及び海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度・時間断面図では、ともに-0.5以下の負偏差はほぼ見られなくなった。南方振動指数は-0.8と昨年7月以来で初めて負になった。このように、太平洋赤道域の大気・海洋では、1998年秋以降続いていたラニーニャ現象あるいはそれに近い状態の特徴がほぼ消滅し、平年に近い状態にある。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温の基準値との差が年末にかけて徐々に増大すると予測している（右図）。

これらのことから、エルニーニョ監視海域の海面水温は、5月のような基準値に近い状態から徐々にやや高い状態へ推移するものと予測される。しかし、秋以降にエルニーニョ現象が発生するかどうかについては、今後の推移を注意深く監視し、判断する必要がある。



エルニーニョ予測モデルによる

エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測  
この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温（基準値との差）の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

（基準値は1961～1990年の30年平均値）